

鈴木三重吉の子ども観:前期「赤い鳥」の綴方を中心に

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/7386

鈴木三重吉の子ども観

— 前期『赤い鳥』の綴方を中心に —

深 川 明 子

1 児童文学に対する興味・関心の形成

— 書簡から探る —

鈴木三重吉の場合、子どもに対する関心以前に、子どもの文学に対する関心が先行している。そこで、まず最初に、児童文学への関心がどのように形成されていったのか、書簡によって探ってみることにする。

鈴木三重吉が児童文学に携わることに至った経緯については、三重吉自身が、昭和2年10月、春陽堂から出版された『明治大正文学全集』第28巻鈴木三重吉集の中で、「私の作編等について」と題して、次のように述べている。

大正五年六月、長女すずが生れる。はじめて子供を得た無限のよろこびの下に、すべてを忘れてすずを愛撫した。そのためにはすずがまだ遊ぶことも出来ない玩具を買いあつめたりすると同時に、お話をよむにはなほさら遠い遠いさきのすずのために、坊間のいろいろの子供の読みものを漁つて見た。そして、そのことごとくが実に乱暴で下等なおどろき呆れた。そこで私は、別にどこへ出すといふ意味でもなく、たゞ至愛なすずと話してやりでもするやうな、純情的な興味から、すずの寝顔を前にしたりして、「潮水の女」外三篇の童話をかいたのがそもそも私が童話にたづさはる、最初の偶然的動機となつたのはいつはりのない事実である。

長女すずの存在がその動機だとするこの見解は、時間が経過して書かれたものだけに、客観的事実と言えるか否かは問題があるにしても、三重吉の心情的な真実を語ったものとして受け止めておく必要があるだろう。

また、作家の野町てい子氏は、当時を回想し

て次のように書いておられる。

この頃、夫人のおふじさんが、三田の病院で逝去され、おらくさんという若い方と結婚され、令嬢すずさんをもうけられた。すずさん御誕生の時の、先生のおよろこびは、非常なもので、もう、何も彼もすずさんを中心に、しかも、何をどうしていいか、わからないといった御様子だった。一と口にいえば、すずさんのために、もっとよきもの、もっとうつくしきものを、与えなければならない、世界中も、出来るならつくり代えたいぐらいのお氣持だったらしい。

「すず子に、絵本を買ってやろうと思って、町の本屋に行ってもろくな絵本がない。絵が下卑ていて、色が汚くて、駄目だから買わないで来た」と、おっしゃった。まだ、一年もたたない赤ん坊に絵本を買う必要はないのに。（下線は引用者）

（『赤い鳥代表作集』3 小峰書店、「赤い鳥」と私p304）

これは、端目にもそう感じさせる事実があったことを意味しており、三重吉自身の見解の傍証となる。ともかく、三重吉が児童文学に興味・関心を示すようになった動機を、多くの研究者は、三重吉自身の先の文章を基本的根拠としながら、その立証を試みている。

これに対して、桑原三郎氏は、『鈴木 三重吉の童話』（35.3 私家版）の「すずきすず伝説から赤い鳥まで」の中で理由を三点あげてそのことに反論しておられる。簡単に要点を紹介しておく。

第1点は、すずの誕生が童話を書く直接の動機となったのなら、そのことは10年後春陽堂の

全集を待つまでもなく、機会は充分あるのだから既述されているべきではないか。

第2点は、すず誕生以前に、三重吉には子どもがいた。

第3点は、すず誕生以前から、三重吉には童話を出す計画があった。

理論的には、極めて説得性のある論である。

更に第三の立場として、三重吉の児童文学への契機を、すずの存在をも含めながら、彼の文学的素質の必要性に主眼を置いて考察しておられるのが、小宮豊隆氏である。氏は、すずの存在、三重吉の小説への行き詰まり、それらを全て肯定した上で、次のように言う。

殊に三重吉のやうに、華華しい出発点を持ち、仮令中途で彷徨はしても、更に自分の「陸地」を発見した者が、さう容易く小説を書く事を断念し得るがどうかは、問題だといふ気がする。三重吉から創造の歓びに与かる意志が失はれなかつたとしても、三重吉が童話の世界に没入する事によつて、其所で彷徨に疲れた自分の魂を憩はせ、其所で生活に汚れた自分の魂を洗ひ浄め、更に新しく自分の「真面目を発揮」しようとしたといふ事も、十分可能な事だつたのである。(鈴木三重吉、『漱石・寅彦・三重吉』、岩波書店昭17.1)(p321)

氏のこの論を嚆矢として、三重吉の児童文学への接近について、すずの誕生、創作意欲の減退などを踏まえながら、三重吉の文学者としての資質に分け入って考察がなされてきている。その研究成果については、根本の正義氏の「三重吉の童話作家への転換理由」(『鈴木三重吉と「赤い鳥」』鳩の森書房1973刊 p69-84)にくわしく整理してまとめられている。そこで、ここではこれまでの問題点の概要を記すに留め、以下、今までの研究の繰り返しにならぬよう配慮しながら、書簡によって、三重吉の児童文学への興味・関心がどのようにして醸成されていったかを具体的に一瞥しておくことにする。

○実は正月のを、文章世界と新小説と新小説と新文林と三つ受け合つてゐて、一つは此正月中に書かないと追つかないのに、まだ一枚も出来てゐない。イライラして芝居へも行けない。丁度熱が出てゐて食物に味がないうやうに、一字一句を書くのに何の興味

もない。苦しいばかり。三重吉全滅の凶兆ではないかと思つてゐる。(大正2年11月28日小宮豊隆宛) ○小生は「桑の実」以来ぐつたりして一寸も創作に気が乗らない。……それでも書かねば食へないから二ヶ月間苦悶したけれど、やつと中央文学に十二枚、文章世界に二十五枚、いづれも極りの悪い程の大駄作をやつとこね上げたばかりで、アトは皆断つてしまつた。神経衰弱もひどいからでもあるが、主としてもう思想が涸れたのである。いつからか、もう行きつまる行きつまると思つて不安であつたが、遂にいいよ低気圧が来たよ。来年はもう作では食へまい。(大正2年12月12日、青木健作宛)

ここには、創作に手がつかず苦悶している様子、そして、創作で生活できないことを彼自身予見している状態を訴えている。従つて、後者には続けて、「只今本屋を出す計画で奔走中だ。まだ秘密。赤門前あたりへ、『三重吉書店』といふのを出すのだ」と、生計をたてる手段を具体的に検討している。

だが、この段階では、児童文学については何も触れていない。しかし、大正3年5月に入ると、「小生 博文館の少女文学叢書とかいふものゝためにゴーティエの小説ホンヤク中。食へんと少女文学まで墮落して行く。」(下線引用者、5月30日井本健作宛)と書いている。生活のために児童文学に関わり出したこと、そして、この時期児童文学を低級なものとみなしていた彼の認識をうかがうことができる。

大正5年に入つてからは、「御蔭で資本は集つたが山の神がまだ帰らないので店が出せん。」と、先の本屋の計画が具体化したこと、そして、「店の資本金の返済用として出版するお伽話五十編はいよいよ着手することにした」(1月31日加計正文宛)と、児童文学を生活のために事業の対象とする計画について述べている。

ところで、この年、児童文学に主体的に関与する中で、彼の認識は徐々に変化を見せ始めている。即ち、7月には、「お伽噺は第一編脱稿。小宮の細かい注意で所々の表現を改訂。……出来たら色々御指教を得たいです。段々になれて上手になるでせう。」(7月11日、池崎忠孝宛)と、他人の意見を謙虚に受けとめ、よりよいものを

志向している姿勢をうかがうことができる。と同時に、それを表現という次元の問題でとらえていることにも着目しておきたい。

更に翌6年になると、お伽噺 50 編中、「只今第二編『鼠のお馬』第三編『星の女』まで書きました。」と、着々と進行していることを告げ、その後に、「一編150枚を書くのに随分骨が折れます。御通読のとき、種々の欠点を御叱正下さいませば幸甚に存じます。」（5月3日、柳下道政宛）と書いている。苦心しながら真剣に取り組んでいる様子がわかる。また、「中身はまだ自信がつかんが少しラクに書けるやうになつた」（7月17日、小宮豊隆宛）とも書いており、内容については確心がないものの、書き慣れてきた様子をうかがうことができる。

このような経過をたどって、彼は7月17日、小宮豊隆に、「一生懸命に苦心して書きましたもので、在来の下等なお伽噺に対して多少の改革となり得るか存じます。」と書き送っている。お伽噺に主体的に関与し、苦慮する中で、児童文学に対する認識が変化してきた。お伽噺の改革に寄与したと確信し得た自信、あるいは、お伽噺の仕事に社会的意義を見出した三重吉は、次に積極的に新しい児童文学専門の雑誌発刊の計画を企図した。次の書簡がそのことを物語っている。

○或ところから金を引き出して、メルヘン専門の小雑誌（コイツハ人が気づかぬうちにどうかしてはじめたい）を起すつもりにして、間もなく着手するハズだつたところ、その男、府下砂村の水害で大損害を被り、出資を断つて来た。（中略）お蔭で、夏以来の企図が水泡に帰した。（10月8日、小宮豊隆宛）

○只今お伽噺専門の雑誌を作る計画をして居ます、藤村、鷗外、白秋三氏に頼み、私と四人で毎号書くやうにするつもりです、よい金主があつたのに、その男が先日の暴風で大損をして金を出さなくなりました、（11月10日、小池恭宛）

大正6年の児童文学雑誌の発刊計画は、当初の計画通りにはいかなかったが断念したわけではない。7年に入って「今度、童話童謡の雑誌を起すので、奔走、こなひだ一寸大阪まで行つて来ました。」（2月15日、池崎忠孝宛）「例の雑誌

の一件で昼夜走り廻つてをりましたので」（2月18日、大道弘雄宛）と、具体化して忙しく動いている様子を伝えている。そして、5月30日、鬼村元成への書簡には、「『赤い鳥』につきましては、いろいろ御配慮に預りまして、誠に有り難く厚くお礼申し上げます。お蔭さまで目下製版殆出来、来月五日頃は発刊になります。」と書き送っている。6年夏に計画した雑誌発刊の初志が貫かれ、ここに「赤い鳥」が曲折を経ながらも刊行されることになった。

ところで、三重吉は、生活の手段であつたお伽噺の仕事に、社会的意義と自己の役割を発見し、そのことが「赤い鳥」発刊の一つの要因となつたと思われるが、それでは、彼は児童文学に対してどのような認識をもっていたのであろうか。「表現」が意識されていたことは、資料として示した書簡の中からも充分うかがうことができると思うが、次の書簡は彼の当時の心境の実態を示すものとして注目しておきたい。

仰せの件、折角ですが、私は今日まで、只漫然と千枚ばかり童話を retell したといふのみで、特別の研究もしてをりませんし、また、纏つた考へも一寸もありません。たゞ、これまでの小波流のもの其の他が、表現と、取扱の精神とに於て、だらしないものですから、廻らぬ筆ながら、表現だけは凝つて見たいといふ主張があるのみで、一向議論を吐くだけの用意は一寸もありません。（大正7年3月4日、本間久雄宛）

児童文学に対する十分な認識がないというのも、正直な心境であろうが、小波とは違った新しいものを志向して、児童文学界に清新の風を送ろうと秘かに思つてもいたのではなからうか。そして、彼がこのように書いたとき、彼の心の中には、「赤い鳥」発刊に当ってチラシに書いたような思いがあつたのだろう。彼は現在の少年少女の雑誌が、余りにも俗悪で、それが子どもの品性や文章に影響を与えていることを、にがにがしく思っていた。彼は、「私は（中略）現文壇の主要なる作家であり、また文章家としても現代第一流の名手として権威ある多数名家の賛同を得まして、世間の小さな人た

ちのために、芸術として真価ある純麗な童話と童謡を創作する、最初の運動を起したいと思ひまして、月刊雑誌『赤い鳥』を主宰発行することに致しました。」と言う。「芸術として真価ある」「純麗な」童話・童謡が彼のめざすものであった。

ここに、三重吉の児童文学に対する基本的姿勢をうかがうことができる。彼がこのような認識に到達した過程は、大正デモクラシーの社会的・文芸的風潮や、長女すずの誕生と生長が彼に影響を与えていることは言うまでもない。と同時に、それは、その仕事にかかわる中で醸成されていった。そして、その中でも特に表現が強く意識されていたのである。

ところで、なぜ彼は、子どもたちのためにこのような児童文学の必要性を強調したのであろうか。その答は、『赤い鳥』創刊号に示された『『赤い鳥』の標榜語』の中に見い出すことができる。彼はそこで「子供の純性を保全開発するため」と言う。子どもを純真な存在として捉える童心主義の立場を明示したことばであると言えよう。(この「標榜語」は、翌大正8年9月号で、文章が全面的に書き改められ、そこでは「彼等の真純な感情を保全開発するために」となっている) 三重吉は、このような子どもに対する認識に立って『赤い鳥』を創刊したのであったが、具体的にはどうだったのであろうか。以下、彼が指導した綴方の中にそれをみていこうと思う。

彼の綴方指導それ自体については、表現の指導に終始していたなど、古くは木村文助の『村の綴方』(昭和4年、厚生閣書店)を始めとして、既に多くの研究成果がある。

本稿では、綴方指導とは別に、綴方に描かれた子ども像を中心に、彼の子ども観、つまり、子どもに対する認識に焦点を当てた考察をおこなってみようと考えている。

Ⅱ 綴方を通してみた子ども観

1 多様な子どもの姿を引き出した三重吉

大正7、8年の綴方を読んでみると、そこに

は実にさまざまな子どもたちが登場している。三重吉の綴方の撰の基準は表現にあり、綴方の内容的価値が問われることはなかった。(彼は、「自分だけが本当に思つたことを、自分のしたこと、自分で見たことを、なんでもかまはず書いてよこして下さい」(8年7月号)「それもなるだけ人がかいていないやうなことを書くのがよいのです」(7年10月号)と繰り返しのべている) そのことが、かえて子どもたちの変化に富んだ生き生きとした実態を浮き彫りにしたと言える。その意味では、この期の綴方には、子どもたちのありのままの実態(したこと、見たこと、考えたこと、感じたこと)が、卒直に現われていると考えてよい。

では、具体的にどのような子どもたちが登場してくるのであろうか。一番多いのは、やはり子どもらしいやや腕白だが活動的な子どもの姿である。

弟 (小5、大正7年11月号)

私の弟は毎日近所のお友達をなかせて来ては、お母さんにしかられます。しかられると、すぐにそのまねをしますので、家中閉口してをります。かんしやくもちで、人がどうかするとすぐにまつかになつておつかけて来ます。しばゐをやるのだといつて、はたきを刀に、はうきをやりにしていろいろなまねをいたします。また、兄さんと角力とつて、かてば大手をふつていぼりちらし、まけるとぶつとほゝをふくらせて兄さんの頭をびしやんびしやんとたゞきます。

またくまり (小5、大正8年1月号)

大ぜいと連れだつて、僕は水を浴びに行つた。すると一番に三郎さんが、「水の中で股くぐりをしようぢやないか」といつた。皆それに賛成した。そして順番にならんた。一番はじめは俊ちゃん番で、だんだんくぐつて僕のところまで来ると、僕はいきなり俊ちゃんをおさへつめた。俊ちゃんは、「ウン、ぶるぶる」とうなつて、目を白黒させながら、手足をべちやべちや動かした。するとみんなが「こらへてやれ、こらえてやれ」といつたので、僕ははなしてやつた。

そのうちに僕の番になつて、俊ちゃんのところまで行くと、俊ちゃんは、「さつきのかたきだ」といつて、僕の足をひつつかんだ。僕は「なにッ」といつ

きにふりはなして、急いで岡へ飛び上った。その時あまりあわてたものだから、鼻に水が這入った。皆が「やアア」と水をたふいて笑った。

上述したこの二つの綴方はその典型的な例とすることができる。子どもならではの世界である。そうかと思うと、次の綴方のように、夕日の美しさに感動して、夕日を追い求めたり、また、綴方は省略するが、満員の汽車の中で困っているお婆さんに席をゆずってあげた子どもなど、豊かでやさしい心情をもっている者も多く登場する。

夕日 （小4、大正8年1月号）

僕と五年の貞岡君と遊んでゐました。すると、西の方へ夕日が赤い赤いインキのやうになつて沈みかけてゐました。

貞岡君とみてゐたら、木の中に見えないやうになりました。二人は、「屋根に上つて見よう」と言つて屋根に上るところをさがしました。……貞岡君が僕に「こゝから見ればよく見える」と言ひましたから、僕も「こゝからもよく見えるよ」と言ひました。……みてゐるうちに、また木のかげにかくれました。「こんどは線路にいつて見よう」といつて、二人でいそいで下りて行きましたら、もう向うの方の山にはいつてゐました。

更には、次の綴方のように、世間では人並みでないと思われている人に対しても全く屈託のない態度で接している。これも子どもならではの世界であろう。

ばかのぶんちゃん （小5、大正7年10月号）

「さあ、ぶんちゃんおいでよ」「まあまつてみなよ」「あゝ」と僕はまつてゐると、ぶんちゃんは三銭のふえをかつてきて、びりびりとならしながら、法恩寺橋の方へ行きました。僕は「おい、ぶんちゃん、お前のとしいはいくつ」とききました。ぶんちゃんは「二十三だ」と言ひました。それからぶんちゃんは、パンやへ行つてジャムパンを二十銭買つて、ふところへ一ぱい入れて、「さあ、おまへにもやろう」と言つて五つくれました。

以上の綴方には、いわゆる三重吉のいう純真な子どもの世界をみいだすことができる。つまり道徳的価値判断以前の純朴な心情に子どもの特性をみい出すことができる。

ところで、綴方には次のような子ども像も出

てくる。「とうふやのお爺さん」（大正7年12月号）は、豆腐を売り歩くお爺さんに嘘をついてからかう綴方である。人の道にはずれたいたずらであると言えよう。また、次にあげる「かにのお墓」は、子どもの残虐な行為を綴っている。これも現実の子どものありのままの一端である。

かにのお墓 （小4、大正8年11月号）

ねえさんが海水浴から、かにをたくさんとつて来ました。……今日もかなめさんが一匹お母さんにひもでいはへていたよいて、お庭を這はせてをりました。少したつて見ると、かににおしつこを引かけてゐます。「かなめさんそんなことをしてどうするの」と聞きますと、「おしつこを引つかけてころしちゃうんだ」といひました。「かはいさうじゃないかい、殺さないで、遊んでおいで」といひますと「いやあだよ」と言つて聞きません。それから金づちをもち出して来て、かにの上に大きな石をのせてその上を金づちでトントン叩きました。そしてしばらくしてたふくのをやめて、石をとつて見て「しんだしんだ」といつてよろこびました。かにはべつちやんこになつて、おなかのところから白い、きみのわるいものが出てゐました。私はかはいさうだからお墓をたてゝやりました。

更にまた、次のような綴方もある。

写生 （小3、大正8年10月号）

日曜日に僕一人で字品の方へ写生に行つた。……いちわるさうな子が来て「おい来て見い見い。こまいくせに写生をしとらあ」といつてゐるうちに、いかにもわるさうなやつが五、六人ほど、どやどややつて来て、いきなり僕の紙をとつて「いやあ、これ見い、ぶさいくなことをかいとらあ」といつてみんなでめちやめちやにちぎつた。……

隣の小僧さん （高1、大正8年12月号）

隣の家は建具屋である。その家に、今年十三ぐらゐの子供が小僧に来てゐる。毎日毎日親方にやられる。或時は川へ行つたきり帰らないので、見つけに行つてやうやうつれて来たこともある。こなひだ私が学校から帰つて来ると、隣の家の裏ががやがやしてゐた。行つて見るとその子を見るのもぞつとするやうにやせて、障子によりかゝつてしくしく泣いてゐた。何をしたのだいとをばさんに聞くと、「この間からゐないゐないと思つてゐたのさあ、さうするとどうだ、今日縁の下から水が流れ出したのよ。縁

の下なぞ何もあゝるわけはないのだけれどもと思つて、見るとこの野郎が蕭切れをしいて、その上へ小便をしてゐたのが流れ出したのよ。いまいまいから引きずり出してひつぱたいのさ」とにらみつけました。するとおくにさんが「まあかはいさうに、うまじさんよせばよいのに」と言つた。私は何もいはずに家に帰つた。

子どもの世界は子どもにとってパラダイスのような理想郷ばかりでもなかった。「写生」に描かれたような、いじめの問題も存在したし、「隣の小僧さん」のように、奉公に出され、虐待されながら毎日日を送っている子どももいた。

現実の実態はともかくとして、子どもたちが描いた子どもの世界だけでもこのように多種多様であった。三重吉は、これらの綴方に対し、一貫して、「目に見えるやうによく書いてあります。」(7年11月号)「事実ありの儘を正直に少しも飾らずに書いたところがエライと思ひます」(8年1月号)など、表現上の問題としてだけ評価して、そこに描かれている子ども自身、あるいは子どもの行動や心情に全く関心を示さなかった。そのことが、これだけの多種多様な子ども像や子どもの世界を引き出す結果となった。規範的な道徳的価値判断をもって子どもをみることもしなかったかわりに、社会的な視点で子どもを捉えることもなかった。それは無自覚な認識であったと言える。

このことをもう少し明瞭にしておくために、彼の童話観に触れておこう。彼は童話の中に「教訓」を入れることに対して、「今どき、『だから悪いことをしてはいけない』位の単なる教訓では、態々一芸術上の作品を待つまでもなく実際に誰でもやり、誰にもやれ、且つ余りに多くの片々たる道徳家がやり過ぎてゐます。」と言ひ、更に次のように言う。

たとへ反道徳的事実の記述でも、別にそれについて註解を費さずとも、事実そのものに作として別箇の意味がある以上は、その際作中の反道徳的事実それ自身は、作者の叙写の態度一つで、決して不道徳の奨励及至許容になる怖れはないといふことです。もしそれ等の条件にも係はらず、その作を反道徳的

なものとして排斥する人があるとすれば、さういふ人は芸術上のエリミネイションを弁へない隻眼者です。(童話作法としての「教訓」「諷刺、皮肉」に対する叙写的態度。大正9年4月号)

童話の中に安易に教訓などを入れることによって、作品の芸術的価値を損つてはならないという芸術至上主義の立場を明確に出している。そして、ここに現実の子どもの実態や認識に目が向いていない三重吉の姿をもまたみることができるのである。

ただ、教訓という問題に絞つてみたとき、たとえば、大正8年11月に創刊された『金の船』には、「最近の子どもの読物が」「こどもに無くてはならぬ道徳的、教訓的方面を閑却してゐる傾向があります。」ということばが見える。このような見解と対比してみると、子どもの読み物である童話の中に教訓を盛りこんで、それを子どもに押しつけるべきではないとする彼の見解は評価すべき面でもある。

ともかく三重吉は、芸術至上主義の立場からその表現を重視した結果ではあったが、子どもによって子どもの世界の実態を引きだした。子どもに対する彼の認識は、極めて観念的であり、現実の子どもの実態とそれは対応しなかったが、そこに問題を感じてもいなかったということができる。

2 規範的道徳を基盤にした人間形成

大正7、8年の上述のような三重吉の考え方に多少変化がみえ始めるのは、9年になってからである。

「赤い鳥」で綴方を指導する中で、彼は学校教育における作文教育に疑問を持ち「綴方を単なる子供の文章」(久芳龍蔵の作文観を評した三重吉のことば)と考えている教師に対して、綴方は子どもの人格や文化と深く関わるとして次のように述べている。

綴方といふものは、換言すれば、われわれの後継者たちの感情思想の表現に対する基本的な、又は、考へ方によつては、その表現方法そのものの全部の教養である以上、その指導の適否が、直ちに彼等の

実生活と、彼等自身の文化の支持発展に対して至大の動揺を伝えることになるのは今更いふまでもない話である。(大正9年4月号)

表現に絶対的価値を見出ししている三重吉にとっては綴方を、「単なる文章」として片付けられなかった。そして、そこに内容的価値を付与した。三重吉からすると久芳の綴方教授系統案などその考え方はやはり形式的なものとしか受け取れなかった。そして、そのことが彼をして綴方を人間形成に内容的にかかわるものというとらえ方を助長させたものと思われる。

では、そのことの具体的な実態はどうだったのであろうか。彼は、同じ号で「高尾山の頂上」という綴方に対して、「きまり切つたことはみんなはぶいて、本当に話すねうちのあることばかりしか書いてゐないところがうれしい。」と評している。ねうちのある題材を書かせることによって子どもの生活にかかわっていきこうという姿勢を見い出すことができる。しかし、この綴方は高尾山頂上で作者がみたことややったことを描写した文章である。したがって、ここで三重吉が「ねうちのあること」と言っている内容は、具体的には書き手の個性的な行動や感じ方を意味しているだけで、子どもの実態を認識した上での生活や生き方と直結したねうちを意味してはいなかった。つまり、彼は、子どもを生活者としての生きた存在として全人的にとらえるのではなく、生活の一部を切りとり、そこに現われた個性的感覚に「ねうち」を見い出していたのである。

しかし、ともかくこのような経過を経て、三重吉の綴方に対する内容的関心が強まっていく。そして、約1年後の大正10年3月号では「うちのおかあさん」の選評で次のような発言をしている。

それよりも寧もつと根本の問題として(引用者註、この前に、文字、仮名遣い、事実の錯誤……以外には、決して表現に口を入れるなど言っている) そんな閑で出来るだけ作品に表はれた事実について、子供たちの生活を正しく深く、大きくするやうに、彼等の実さいの考へと行ひとの上に適当な注意

を与へて下さい。綴方は常に子供等の実生活を窺ひ計る、好箇の機会を与へてゐるのです。

子どもたちの生活を正しく、深く、大きくするための注意を与えてほしいと教師たちに注文をつけている。1年前の発言には、表現の側からみたねうちに主眼がおかれていたが、ここでは、子どもたちの生活の内容にかかわっての発言となっている。ここによりやく彼が現実の子どもに関心を抱き始めた様子を知ることができる。そして、その時彼が意図したことは具体的にどのような形で現われているだろうか。同号の「水曜日の午後」という綴方の評に、彼は、「先生にあだ名をつけてゐたりするのはいけません。お仲間のうちでお互に戒めて下さい。」と書いている。子どもの生活に関心をもち、生活態度の指導の重要性を強調したが、その実態は規範的道德を説く教訓であった。

以上のことをもう少し明確にするために、次に、同じような題材の綴方に対して、三重吉の評がどのように変化しているかを示しておくことにする。

鼬(いたち) (小6, 大正9年6月号)

……しばらくすると、そこへ一つの穴が出来た。「はあ穴が開いた」と言ひながら手をその穴へおしこんだ。「はあ、あるある」と言つて、一匹の鼬を引き出した。見ると頭がない。そこから濃い血がたらたらたれてゐる。それをそばの石の上にのせて、ポケットからナイフを出して、鼬をひざの上にのせて、腹へナイフを入れてすつと頭まで切つた。足にも切りめを入れて、それから頭の所をむいて、血のたれてゐる所を左手でつかみ、右手でむけた頭の皮を持つてひつぱつた。すると、すつと、きたいにむけた。皮には血もついてをらぬ。体は真赤になつてゐる。手には濃い血がいつぱいついてゐる。……

いたち (小4, 大正10年5月号)

……正夫さんは「ちよつと来てん」といつたので行きますと「このいたち、ころそか」といひました。正夫さんは「こうして皮をとると五十銭ほどするかもしれへんで」といひました。幸市さんはいなきばう、秀雄はかしのバツト、私はてんころづち、ようさんはひばし、正雄さんは下駄。一番さきは幸市さん。幸市さんはうまいことはらをどつきまし

た。こんどは正夫さんの番になりました。正夫さんはうまいこと、いたちのせなかをどづきました。いたちはいかにもいたさうにくんくんとないてゐました。私は大きな天ころで、いたちの足を力一ばいどづきました。いたちはくんくんとないてぶすとへをこきました。そのいたちのへはくさくてくさくてをれませんのでみんなはとんで出ました。けれどもいたちは、よううごきません。秀雄は「ようへをこきくさつたのう」といつて、いたちのしりをどづきました。いたちはそのまゝころんと死にました。そこで私と正夫さんとは板にのせて、みぞへつれていつて皮をとりかけました。すると中の身が見えて胸がいつばいになりましたので、外を見て「きたないのう」といふと「そない、きたないことない」いひましたので「もう、きたないことないのう」といひました。その内に正夫さんは皮をぐれんしよと、とつてゐました。……

前者の綴方に対する評は、「四人の子供が猟師の手つだひをして、うたれた鼯を取り出すところがありありとよくかけてゐます。くびの取れた鼯が、くると赤はぎにされるところなぞは本当に目の前に見るやうです。めづらしいことを書いたものです。」(下線は引用者)とある。「ありありと」「目の前に見えるやう」と表現の評価と、「めづらしいことをかいた」と、題材の清新さと着眼点を評価している。これに対して、後者では、「子供の生活がよく生き活きと写せてゐます。尻をかまされるところなぞは、ひとりでに笑はないではられません。ただ、いたちの皮を剥くところは少し可哀さうです。これからは、そんないたづらはしない方がいゝですね。」(下線は引用者)と述べている。生活が生き生き描かれているといいながらも、その行為については否定的見解をとって戒めており、この間の三重吉の態度の差を読みとることができる。

このような経過をたどって、三重吉が子どもの生活態度に積極的に関心を示し、生活態度を選考の基準とするに至ったのは、大正11年に入ってからである。即ち、大正11年2月号には次のように書いている。

今度の入選作の第一においた「学校へ行く道」

は、叙写としては実にうまいもので、みんなの言動や、川の中をもがき廻る子猫の実さいが、一々まざまざと目のまへに見えます。しまひに、自分たちのしたことが、うす気味がわるくなつて、人ごとのやうに言つて遁げて行く気持なぞも、よく実感が出てゐます。併し、実さいの事実そのものは、ずるぶん残酷です。あんないたづらをしないで、ほかに慰みやうもあるでせうに。何の罪もない生きものを、あんなにまで苛めつけるのはひどいです。作の技倆から言へば十分賞にしていゝものですが、したことがあまり乱暴なので、わざと賞に入れないでおきました。これからはどうかあんないたづらは一さいやめて下さい。(下線は引用者)

綴方の内容について、道徳的立場から価値判断をおこない、それを選考に反映させている。では、実際にどのような乱暴なことがあったのか、次にその綴方の一部をあげておく。

学校へ行く道 (小6、大正11年2月号)

この間の朝みんなにおくれたので、追い付かうとして走つて来ると、勉さん等は新川のせきの上に立つて、「暉やん、早こいよ。猫、はむんねぞー(記者註・投げこむのだよの意)」と言つてゐるので走つて行くと、作治さんは子猫をかゝへてゐた。……猫は、だぶんと水の中にはまつた。猫は糞かき泳ぎでどぶんどぶんとやりながら、私の方の岸へはひ上らうとするので、勉さんはかきの頭でつつこんだ。猫は今度は大部弱つて、目を丸くさせて、きばをむいて、又北の方の石垣へかき上つて来るので、勉さんは又下駄でたゝいた。猫はせつなさうに首だけヒげて、だぶだぶ泳いだ。猫の毛はぬれにぬれて倒れてゐる。早い流れのところへ来て、なんぎをしてゐたが、見てゐる中に、せきの柱へすがりついた。「早くたゝいたれよ。上つてくら」と皆がわわ言つてゐるので僕は又ごさん竹でなぐると、よけいに柱にかきついて、僕の方をじつとながめてゐる。僕は腹が立つたので猫の胸をぐいといつくと猫は、にやにやにやとなきながら柱にかきついてゐる。勉さんと精三はんは、砂や石をかつつけた。猫はしかたなしに水へまたはまつた。北の方の岸へかき上つてくるので、ぼくとでつくと、石垣の中に頭をつつこんで、にやにやと苦しさうになつてゐる。僕は一生懸命にごさん竹の根のまいた、かたいところでびしやびしやなぐつてやると、猫はとうとう石垣へはひつてしまつた。……

かなり残酷な行動ではあるが、子どもの世界では似たようなことはよくあった。

ともかく三重吉は、選考の基準として自らその態度を明らかにするとともに、指導の教師に対して、「児童の思想や実際の生活を指導して下さることをお祈りします。」(大正11年2月号)と、ストレートな表現で、生活態度への指導を要請している。

以下、この年三重吉が書いた選評を拾ってみる。

○「しやも」は、罪もない生きものを血だらけにさせたりすることを非難してゐる心持が感心です。あんな、ざんこくな遊びごとは、もうとくにすたれたことゝ思つてゐましたが、まだやつてゐるのですかね。(大正11年6月号)

○鈴木さんもこれでもつて、われわれはお互に、自分自分が正しく生きる以外に、ときには、いろんなわるい人に対して警戒もしなければならぬといふ、厄介な課業を教はつたわけです。いやなことですね。(大正11年9月号)

○小さい人をあんなにじらしてはいけません。もつとお姉さまらしくなつて、よく可愛がつてお上げなさい。あんなにすると、あの小さい人がだんだんにひねくれて来ます。(大正11年11月号)

以上、ほんの一例にすぎないが、いわゆる大人の規範的徳徳や処世訓に基づいた指導がそこにみられる。子どもの特性を認め、子どもを解放するよりは規制する立場に立っている。

3 子どもの特性としての子どもらしさの認識

以上のような態度も大正11年頃がピークで、大正12年に入ると、「おぢいさんに失策を見られるのを怖れて隠して投げ投げするところなどは事実としてよくないことです④、心持はよく出てゐます。」(大正12年4月号)とか、「あんな乱暴な喧嘩をするのは、あまり感心も出来ません④、それを別問題にして読みますと、…」(大正12年6月号)という表現に変化している。

綴方を通して、現実の子どもに関心をもち始めたが、その時、彼の子どもをみる眼はいわゆる

る従来の大人の眼でしかなかった。しかし、元来彼は、前述の童話観のところにも現われていたように表現活動が道徳に従属したり、制限されたりすべきでないという考えをもっていた。12年に入ってから選評は、彼のそのあたりのジレンマを表わしていると言える。そして、もともと表現それ自身を重視する彼は、子どもたちの綴方の中に真実の子どもらしさを見出した。それは、創刊当時の7～8年頃、子ども像を観念的に捉えているだけで、現実の子どもに対しては無自覚であったのとは異なり、子どもが見えてきた中での発見であった。

この頃、三重吉が評価したのはどのような子ども像であったか。それは、やはりのびのびとして活動力のある、いわゆる子どもらしい子どもであった。彼は子どもの綴方の中にようやく現実の子ども像を自覚しだしたのである。

○これも(引用者註「板すべり」)すらすらとよくかいてゐます。みんなの元気のいふ、いたづら好きな活動がすつかり目に見えます。しまひの方で、三年の子が頬に大穴をあけたというところなどは、短い叙述ですが、思はず頬がしかめられるくらゐ、いたいたしい実感が浮びます。下らないことで怪我をしたりしてはつまりません。いたづらも考へてしないと大変なことになります。(下線は引用者)

これは、大正12年3月号の選評である。子どもの活発な活動を評価しているが、同時に、またそれに対する注意も与えている。先にのべたように12年の前半はこのように、生き生きした子ども像に子どもの価値を見いだしながらも、一言注意せずにはおれない姿勢をみることができる。このような状況をしばらく送って、12年後半からは、彼の中でそれがふききれてくる。以下、そのころの選評をあげてみる。

○その次の山口君の「水あび」は、子供たちの活力そのものを集め固めたやうに、元気の充ち充ちた愉快な作です。(大正12年11月号)

○いたづら好きな子供たちの行動がまざまざと目に見えます。(大正13年5月号)

○その次の、やはり六年生の宮本君の「はこべとり」では、最初のあたりで、物を言はないごつこをして、ぶつたり、ぶたれたりするところだけはよく

活き躍つてをり、子供特有の元氣さに微笑されて来ます。(大正13年9月号)

○暑い川原の石の上をびよんびよん飛んで行つたりして……………すべて、いきさが本当に勢ひよく目のまへに生き躍つてゐます。少年らしい元氣にみちた、面白い作です。(大正13年11月号)

いずれも子どもらしい活発性を評価していることがわかる。次に、作品を一例あげて、具体的に検討してみることにする。

雪すべり (高1, 大正13年3月号)

去年のことだ。僕と左門君と次丸君と義郎君と四人であそんだ。……………左門君が「雪すべり」と言ひながら、社務所の東へ走つて行つた。で、僕も内へ来て、靴をはいて走つて行つたら、はい「つるつるつる」やつてをつたで、僕もなかまになつてつるつるつるとやつてゐたら、びたんと、へこつたら、その上へ左門君がのつて来る。いたいのつたら、僕がおきたところへもつてきて、義郎君がへこつた。さうしたら、僕のかゝとへぶつめたもんやで、又つるんべたんとへこつた。……………こんどは義郎君がどこからか板をひこづり出て来て「これこれ」と言ひながら、一人のつて坂を下つてつるウがちやんとへこつて「あゝいたいた」と言ひながら、板を置いて坂を上つて来た。こんどは三人のることにきめた。左門君が一番前で、運転手で、後の二人が客で、僕が押してやる人で「それッ」と言つて押してやつたら、下の石の出でゐるところに、ぶつかつたために、堀の中へ、三人とも、がちやんところがりこんだ。その上へ板が頭をたゝいた。「あゝいたいた」と言ひながら、起きてきて、交替してこんどは僕がのつた。こんどは運転が上手なもんやで、へこりやせん。あまり遊びがはげしいもんやで、しまひには頭からぼつぼつと、ゆげが出だしたので、下の婆やが大きな大きな口をあいて、笑はした。

選評は、次の通りである。「吉田君の『雪すべり』は事実的にも痛快な作品です。することが少し乱暴ですが、併し男の子ならあのくらゐの元氣がなくてはなりません。」1年前の大正12年3月号で、同じような題材で書いた「板すべり」の選評(p 27)と比較してみると、その相違がわかる。

このようにして、三重吉はたしかに子どもがみえてきて、彼なりに子どものあるべき姿を実

感をもって捉えることができるようになった。しかし、子どもの問題がそれほど深く認識されていたわけではない。彼の子ども理解の程度を示す例として、次にその綴方と選評をあげる。

ひぜん 小5 (大正14年5月号)

……………その内にまり(引用者註・デットボールをしている)がはねかへつて、私とりり子さんのところへころんで来た。私は前からまりがほしかつたので、手を出さうとすると、雨降りの翌の日だったので、足がすべつてころんだ。ころぶとりり子さんも顔を出して、二人で顔のぶつけこしてしまつた。私は前からりり子さんがひぜんだといふことを知つてゐたので、びつくりして、もしかしたらひぜんがうつつたかと思つてとび立つた。そして顔へ手をあてゝ見ると、なんだかうつつたやうな気がした。私はもしさうだらといつしに顔をなでて見た。

私はひぜんだら、お父さんと姉さんにしても、よその人から「かつちやんはひぜんだつちゆう」「あの家はひぜんのある家だ」などといはれると、きつといやに思ふにちがひない。私はどうしたらよいかと、一心にかんがへながら教室へはいつた。すると、うめちやんや、よね子さんや、みきちやんや、やつさんや大ぜいで、りり子さんの顔を見てきては私の顔とくらべて「あゝおなじちやん」などと、まるで、ひぜんのやうなことをいふので、つい私は、泣いてしまつた。私は、あさつて学校へ来ても、ろうかのはじで、ちどこまつてゐなければならないかと思ふと、なんだか、やたらなみだが出てならなかつた。そこへ先生が来て、「かつちやん、なにをした」ときかれたが、なんにも返事が出来なかつた。すると、すこしたつと光子さんが明かしたら、先生は「こつちい来い」といつてくすりやへびやいろいろ入れてあるところへつれていつて、「泣けばなほるつちゆうだか、ばか」といひながら、なんだかくすりをつけてくださった。そして「ひぜんちやあねえ」といはれたが私はまだあんしんしなかつた。その内にやすみになつて家へかへつたが、しごともしず、たゞあさつて学校へ来ても、ろうかのすみにちどこまつてゐなければならないのか、などとばかりかんがへてゐた。

選評には、「進藤さんの『ひぜん』は、人と顔をぶつけ合つただけで、すぐうつとも限らないのに、やたらにわいわいさわいだり泣いたりするのは少し滑稽ですが、併し事実としてそ

こが、いかにも子供らしく十分同感出来ます。可愛い進藤さんです。」とある。

デッドボールで、作者がひぜんの子どもとぶつかったので、ひぜんが移って、自分もひぜんになったときの状況を想像して、肩身の狭い思いで暮さねばならないことを心配して書いた綴方である。ひぜんになって、「ろうかのすみでちよこまつてゐなければならぬのか、などとばかりかんがへてゐた。」ということだが、二度も書かれているということは、そのようにしている子どもが現にいるということでもあろう。はからずも、この綴方は作者の、友だちに対する認識をあらわしたことになるが、それはとも角として、三重吉の選評はどうであろうか。ひぜんのるり子さんに対する関心が全く欠落しており、作者と同次元でしかこの問題をとらえていない。「可愛い近藤さんです。」と言う前に、一言その問題点が指摘されているべきであるが、それは無視された。彼には、子どもたちの行動や心情が無邪気であることが問題であり、その行動や心情を客観的に捉えてみようとする視点はなかったのである。彼の子どもに対する認識はこの程度であった。

4 「子供の純性」についての認識

最後に、三重吉が『『赤い鳥』の標榜語』の中に書き、一般に「赤い鳥」の理念とみなされている「子供の純性」に関して考えてみたい。

三重吉は、綴方の批評に、「うぶうぶしてゐる」とか「純朴」であるとか「純素」ということばを多用しているが、これは常に表現や表現態度に対しての評であった。子どもに対して興味・関心を示さなかった三重吉は、子どもの特性として、子ども自身に「純朴」「真純」を見いだしたのではなく、表現の中にそれを見い出し、そして、そういう表現や表現態度を高く評価したのであった。そのような表現は、大正11年頃から急に多用され、12年にピークを迎える。12年の中から具体的に彼の選評のことばをあげておこう。

○以上三つとも、要するに、事象をよくつかんで、

飾りのない言葉でいきいきと表わし動かしてゐることと、表現の態度がどこまでも、うぶうぶしく純朴なところが値打なのです。(1月号)

○飾り気の一寸もない純朴な作品。(2月号)

○うぶうぶしていぢらしい作。(2月号)

○うぶうぶして可愛らしいところが取柄。(4月号)

○うぶうぶしく純朴。(4月号)

○小ましやくれた態度や表現がなく純にうぶうぶしてゐる。(5月号)

○こましやくれていなく うぶうぶしてゐる。(7月号)

○純な感受、純な書き方。(7月号)

○たゞ、飾りや、いやみのない、普通のまゝの言葉でもつて、よくとりまとめてかいてゐる。とゞのつた手法と、態度の純朴さとだけが取柄ぐらゐなものです。(8月号)

たとえばこのような感じである。

だが、このことばもしだいに子ども自身の実態を示すものとして使用されるようになる。昭和2年5月号に、尋常1年生の綴方に対して、彼は次のような評を書いている。

低年生の作は、当然、すべて事実が大づかみであり、感情も、ろくろくかきあらはし得ず、表出そのものも、たどたどしいものなので……せつかくかきつづられた一つ一つの叙出の、言外に持つてゐる陰影を見落しがちで、とかく、いい作品をも、つまらなく見てしまひがちです。その点に十分留意した上、その単純さの中に貴くふくまれてゐる、濁りのない、うぶうぶした感受と純素な感情とを守り立てゝいかなければ、せつく与へられてゐる自然のよい素質がだんだんに硬化して、しまひには、きまりきつた定型的なことしかかけないやうになつて来るわけです。(下線は引用者)

作者を「うぶうぶした感受と純素と感情」の持ち主として、その素質を高く評価している。つまり、綴方を書いた子どもに純性を認め、それは守り育てていかねばならないものと考えていることがわかるのである。

三重吉は、この純性ということばを、人そのものを表わす概念であるにとらえることができるようになったとき、一つは、それを前述したような純真無垢な幼ない子どもの上に見いだした。ここによりやく彼が、観念的にとらえてい

た子どもの純性ということばが実感をもって認識されたのである。

そして、もう一つは、彼は農村生活やそこに住む人々に見い出したのである。以下、選評のことばによって、そのことを示しておこう。

- 村落の純情にも興味があり（昭和3年8月号）
- 純朴な村落的気分が躍動してゐます。（昭和3年10月号）
- 無邪気なかはいらしい村落詩的な作篇です。（昭和3年11月号）
- 要するにこの一篇には、あゝして針をしかけ、その針を上げにいく、子供の心の愉快なおのゝきが、すべての村人の子供の日そのものゝ全き象徴のやうに、純に、うぶに、すがすがしく裏打ちされてゐます。（昭和3年12月）
- 何のくつたくもない、村のわんぱくどもの風貌が躍動してゐて笑はせます。……単朴な村落相がにじみ出てゐて都会に住んでゐるわれわれには特に

あはれふかいです。（昭和4年1月）

しかし、現実の問題として、農村社会は彼が考えるようなものでなかったことも事実であった。都会人が農村の風景の中に純朴さを見い出し、そこに住む人々を美化して想像した観念論にすぎなかったのである。（彼が農村に着目し、そこに純性をみようとした三重吉の着想は、やがて、たとえば、富原義徳に影響を与え、『土の綴方』を生む契機となったこと、また、そのような農村への関心は、間接的ではあるが、生活綴方の基盤を醸成するに一定の役割を果たしたことは、既に指摘されている通りである。そのような歴史的役割を果たしたことは別の問題であるので、ここでは触れない）

付記。本稿は、昭和59年10月、全国大学国語教育学会での口頭発表を補正したものである。